在籍校名　　宗像市立日の里中学校
職・氏名　　教諭　山本　赳郎

研　修　報　告　書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

１　研修種別

Ｄ　福岡県教育センター研修員

２　主題研修について

研究主題　音楽を深く味わう生徒を育てる中学校鑑賞領域の学習指導
―創作タイムと批評を関連させた題材構成を通して―

⑴ 研究のねらい

ア　課題の背景

中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説音楽編では、「感性を働かせて、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る」「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習の充実を図る」と示されている。これは、生徒が音楽のよさや美しさなどを味わったり、他者とコミュニケーションを図りながら、音楽が自分にとってどのような価値があるのかを考えたりすることが求められていると考える。さらに、音楽のよさや美しさなどを味わって聴くことは、音楽文化についての関心や理解を深める学習の充実にもつながると考える。これらのことから、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、客観的な理由を基に批評し、音楽のよさや美しさなどを捉え直し、音楽を深く味わうことのできる音楽科学習に取り組む必要があると考え、本主題を設定した。

イ　研究の目的

中学校鑑賞領域の学習において、音楽を深く味わう生徒を育てるために、創作タイムと批評を関連させた題材構成の有効性について究明する。

ウ　研究の仮説

創作タイムと批評を関連させた中学校鑑賞領域の題材構成において、次のような手立てを講じれば、音楽のよさや美しさを根拠にして、自己のイメージや感情を説明し、自分にとっての価値を考えながら音や音楽を聴くといった、音楽を深く味わうことのできる生徒が育つであろう。

＜手立て１＞音楽を形づくっている要素を焦点化する比較活動の位置付け
＜手立て２＞創作する、聴く、批評する活動における支援の工夫
＜手立て３＞音楽の特徴を可視化する ICT の活用

⑵ 研究の構想

ア　主題の説明

(ｱ) 主題について

「音楽を味わう」とは、曲想や音楽の構造を捉え、音楽のよさや美しさを見いだしていくことである。本研究において「音楽を深く味わう」とは、曲想や音楽の構造を表層的に捉えたり関係的に捉え

たりして、見いだした音楽のよさや美しさを根拠に自己のイメージや感情と関わらせて、自分にとっての価値を考えながら音や音楽を聴くことである。以下のようなステップを踏むことで、自分にとっての価値を考えながら音や音楽を聴くことができると考えられる。

【ステップ１】曲想や音楽の構造を表層的に捉える
【ステップ２】曲想と音楽の構造とを関係的に捉え、音楽のよさや美しさを見いだす
【ステップ３】音楽のよさや美しさを根拠にして、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせる

ステップ１の「曲想や音楽の構造を表層的に捉える」とは、楽曲と初めて出合った時の「迫ってくる感じ。」「動機が反復しているな。」といった曲想や音楽の構造について気付くことである。ステップ２の「曲想と音楽の構造とを関係的に捉え、音楽のよさや美しさを見いだす」とは、「この曲のよさは、動機が休みなく反復され、迫ってくるように感じるところだ。」のように、曲想と音楽の構造との関わりを根拠にして、音楽のよさや美しさを説明できることである。ステップ３の「音楽のよさや美しさを根拠に、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせる」とは、「この曲は、動機が休みなく反復されていて、迫ってくる感じがします。だから、この曲を聴いて、何かに追いかけられている場面が想像できたり、ドキドキする感じがしたりするところが私はとても好きです。」のようにステップ２で見いだした音楽のよさや美しさを根拠にして、自己のイメージや感情を説明することである。このようなステップを踏むことで、自分にとっての価値を考えながら音や音楽を聴くことができる生徒の育成につながる。

(ｲ) 副題について

「創作タイム」とは、鑑賞曲の特徴を基にして音遊びをしたり、簡単な旋律をつくったりすることである(表１)。実際に音を出し、試行錯誤しながら音楽をつくることによって、体験的に鑑賞曲を捉えることができ、曲想と音楽の構造との関わりを知覚・感受したことを根拠に理解することができる。「我が国の伝統音楽のよさや美しさを味わうことができる生徒を育てる音楽科学習指導－創作リレーを位置付けた鑑賞活動を通して－」(平 23)の研究では、「鑑賞活動に創作リレーを位置付けることは、要素と曲想とのかかわりや伝統音楽の特徴と背景とのかかわりの理解を深めるために有効だった」とあることから、本研究においても鑑賞の学習に創作タイムを位置付けることは、曲想と音楽の構造との関わりを知覚・感受したことを根拠にして理解する上で有効だと考えられる。「批評」とは、音楽のよさや美しさなどについて、他者と伝え合い、論じ合うことである。批評することによって、多くの人が共通に感じ取れるような、よさなどを捉え、他者と共有、共感することができ、深く味わうことにつながる。「創作タイムと批評を関連させる」とは、創作タイムで試したり演奏したりしたことを根拠にして、よさや美しさなどについて批評することである。このような批評する活動を行うことで、見いだした音楽のよさや美しさが明確な根拠となり、自己のイメージや感情を説明することにつながると考える。「創作タイムと批評を関連させた題材構成」とは、導入で出合った楽曲を深く味わうために、展開に創作タイムを設定し、終末に批評を設定していくことである。このように位置付けることで、音楽の特徴を体験的に理解したことが実感を伴った根拠となり、自己のイメージや感情と、より結び付きやすくなる。音楽と自己のイメージや感情が結びつくことによって、自分にとっての価値を考えながら音楽を聴くことができ、音楽を深く味わうことにつながると考える。

表１　創作タイムの具体

創作タイムの具体
○音遊び ・ボイスアンサンブル ・リズムを模倣する ・言葉を唱える ・リズムを打つ
○旋律づくり ・音楽の仕組みを用いる ・即興的に音を選択したり、組み合わせたりする ・和音に合わせる

イ　研究の内容

(ｱ) 音楽を形づくっている要素を焦点化する比較活動の位置付け

音楽の学習を進める上で、思考・判断の拠り所となる音楽を形づくっている要素を焦点化し、生徒が見通しをもって学習に取り組むことができるようにする必要がある。そのために、音楽を形づくっている要素の共通点や相違点を見いだすことのできる比較活動を導入段階に位置付ける。その際、実

際に手を叩いてリズム演奏をしたり、指揮をしたりするなど、身体の動きを伴って比較することで、共通点や相違点を体験的に見いだすことができる。このような比較活動を行うことで、思考・判断の拠り所となる音楽を形づくっている要素を明確にすることができ、創作タイムにおいて捉えていく音楽を形づくっている要素を焦点化することができると考える。

(ｲ) 創作する、聴く、批評する活動における支援の工夫

創作タイムを展開段階に位置付けることで、曲想と音楽の構造との関わりを体験的に理解することは可能になるが、活動の目的が、「音楽を深く味わう」という目的ではなく、創作すること自体が目的となることが懸念される。そこで、創作する、聴く、批評する活動における支援の工夫を行う。創作したことを聴く場面では、「鑑賞曲と同じような反復になっているから、似た面白さがあるね。」など、創作したことに対して、鑑賞曲と関連付ける価値付けを教師が行う。このように価値付けを行うことで、創作タイムと聴く活動を関連させることができ、鑑賞曲の曲想と音楽の構造との関わりを実感することにつながる。さらに、終末段階の批評する場面では、創作タイムで実感したことを基にして鑑賞曲のよさや美しさなどについて伝え合う。その際に、「あなたが鑑賞曲を流すならどんな場面や状況なのか」のように音楽のよさや美しさを根拠にして自己のイメージや感情を説明することができる発問を行う。このように、創作する、聴く、批評する活動における価値付けや発問などの支援の工夫を行うことで、音楽を深く味わうという活動の目的をもったまま創作タイムを行うことができ、音楽と自分とを関わらせ、音楽を深く味わうことにつなげることができる。

(ｳ) 音楽の特徴を可視化する ICT の活用

批評する場面では、創作タイムで捉えた音楽の特徴と鑑賞曲の特徴とを結びつけ、音楽のよさや美しさについて明確な根拠をもって批評を行う。そこで、生徒が創作タイムでつくったり、演奏したりした音楽の特徴を、ICT を活用して可視化する。例えば、生徒がタブレットで記録し、提出した音楽を教師が楽譜にして全体で共有しながら、よさや美しさを見いだしていくことが考えられる。可視化することで、音楽の特徴のどのような部分がよさや美しさの根拠なのかを考えることができ、鑑賞曲を聴いたときにどのような部分に着目して聴くのか見通しをもつことができる。このように、ICT を活用して音楽の特徴を可視化することで、明確な根拠をもって批評する活動を行うことができると考える。

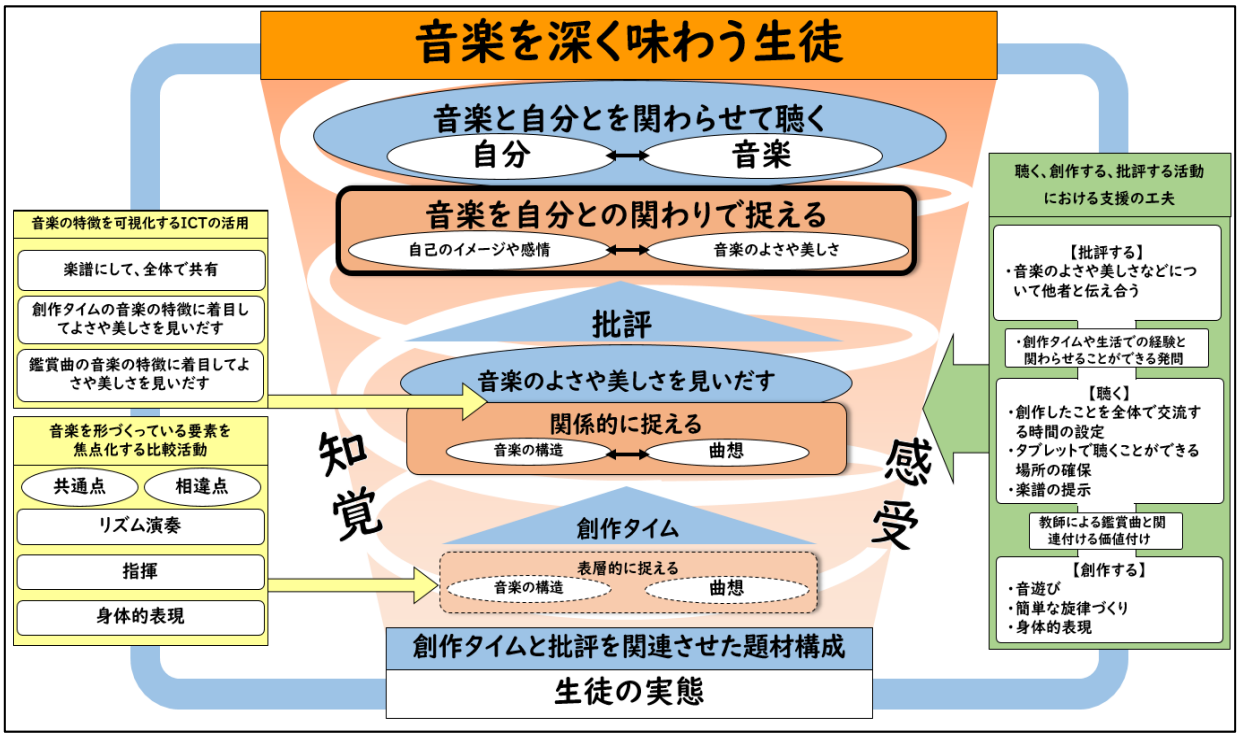


図１　研究構想図

(3) 研究の実際

ア　実証授業の学年及び題材計画（全３時間） Ａ市立Ｂ中学校第８学年Ｃ組(36 名)

題材名　繰り返す!?変化する!?「交響曲第５番ハ短調」の動機

教材曲　「交響曲第５番ハ短調」　L. v. ベートーヴェン

目標	○　曲想とリズムや構成(反復、変化)との関わりを理解することができる。【知識】 ○　リズムや構成(反復、変化)を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、曲に対する評価とその根拠について考え、自己のイメージや感情と関わらせながら聴くことができる。【思考力、判断力、表現力等】 ○　曲想やリズム、構成(反復、変化)の働きに関心をもち、音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組み、音楽に親しむ。【学びに向かう力、人間性等】	
段階	**学習活動**	**配時**
導入	○　「交響曲第５番ハ短調」の動機を演奏したり、指揮をしたりして、動機のリズムや構成(反復、変化)に着目して聴く。	1
展開	○　動機を使って反復や変化を試したり、演奏したりして「交響曲第５番ハ短調」の動機の反復や変化によって生み出される雰囲気などに着目して聴く。	1
終末	○　動機のリズムや構成(反復、変化)の特徴を基にして、よさや美しさを見いだし、自己のイメージや感情を伝え合う。	1

イ　実証授業の実際と考察

(ｱ) 導入(第１時)

導入段階では、「交響曲第５番ハ短調」の動機のリズムや構成(反復、変化)の特徴に気付き、動機によって生み出される特質や雰囲気を捉えて聴くことをねらいとした。そのために、冒頭の動機と展開部に表れる音程が変化した動機とを聴き比べる活動や、全体で動機のリズムを手で叩いたり、指揮をしたりする活動(創作タイム)を設定した。聴き比べる活動では、手を叩いてリズムを確認する姿や、「リズムが一緒だ。」「音の高さが違う。」などの発言があった。その後、楽曲全体を鑑賞すると、資料１のような、動機を表す言葉を多く使ったり、動機の表れる回数に着目したりしている記述が見られた。これは、リズムや構成(反復、変化)の特徴に気付いたと言える。リズムを手で叩いて演奏したり指揮をしたりする活動(創作タイム)では、八分休符に気付いて、「八分休符があることで恐怖感がある。」「八分休符はパワーをためている感じ。」などの発言があった。これは、動機によって生み出される特質や雰囲気を感受した姿と言える。これらのことから、聴き比べる活動と、リズムを手で叩いて演奏したり指揮をしたりする活動(創作タイム)の設定は、動機のリズムや構成(反復、変化)に気付き、動機によって生み出される雰囲気を捉えるために有効だったと言える。

はじめのジャジャジャジャーンよりも低いジャジャジャジャーンが３回目にあった。反復がたくさんあり、４，５回目のジャジャジャジャーンはとても暗い感じがした。
６回目は、パパパパーンみたいな感じがした。タタタターン（８回目）があり、明るい感じがあった。１０回目ぐらいは、ぽぽぽぽーんみたいな優しい感じがした。
大きい音と小さい音が反復しあっていた。

資料１　聴き比べる活動後に鑑賞した時の記述

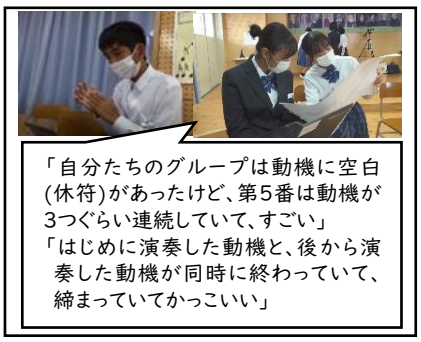
(ｲ) 展開(第２時)

展開段階では、曲想と構成(反復、変化)とを関係的に捉え、音楽のよさや美しさを見いだすことをねらいとした。そのために、「交響曲第５番ハ短調」の動機を使った音遊び(創作タイム)を設定した。音遊び(創作タイム)では、「全員で演奏した後に、一人ずつ順番に繰り返してみよう。」「重ねたときは居心地がよかった。」などの発言があった(資料２)。これは、動機の反復の仕方や変化によって、雰囲気(曲想)が変わることを実感していると言える。さらに、音遊びで遊んだことを交流すると、「ずっと(動機が)続いていて、間が空かずに楽しめる。」「連続しているところが面白かった。」などの発言があった。

「全員で演奏した後に、一人ずつ順番に繰り返してみよう」
「重ねた時は居心地がよかった」
「一人だと緊張する」

資料２　創作する活動

これは、動機の反復の仕方や変化によって、雰囲気(曲想)が変わることがよさだと捉えていると言える。その後、鑑賞曲を改めて聴くと、「自分たちのグループは動機に空白(休符)があったけど、第５番は３つぐらい連続していて、すごい。」「はじめに演奏した動機と、後から演奏した動機が同時に終わっていて、締まっていてかっこいい。」と発言があった(資料３)。これは、関係的に捉えた曲想と構成(反復、変化)を根拠にして、「すごい。」「かっこいい。」などの鑑賞曲のよさや美しさを見いだすことができたと言える。また、第２時の生徒Ａの振り返り(資料４)に着目してみると、動機の変化によって雰囲気(曲想)が変わることを理解し、音楽のよさや美しさを見いだすことができた記述をしている。これらのことから、動機を使った音遊び(創作タイム)は曲想と構成(反復、変化)とを関係的に捉え、音楽のよさや美しさを見いだす上で有効であったと考える。



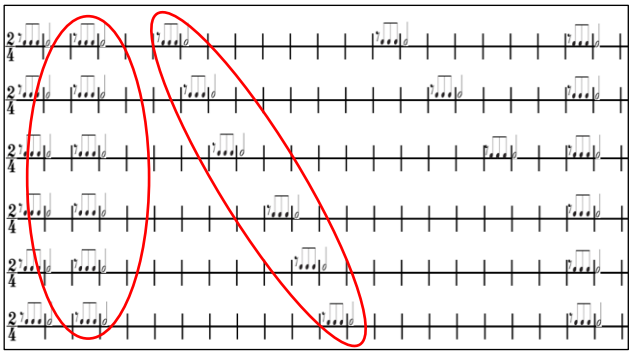
資料３　聴く活動

動機の変化の仕方によって、音楽の雰囲気が変わったなと感じやすかったと思います。音が低いと暗い感じになったり、高い音だと明るく感じたりできたので、わかりやすかったです。

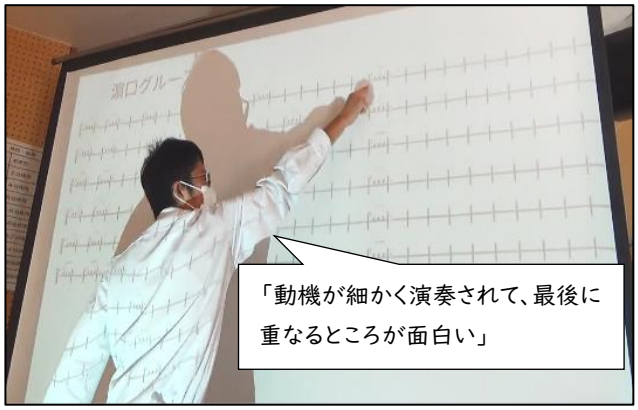
資料４　第２時の生徒Ａの振り返り

(ｳ) 終末(第３時)

終末段階では、見いだした音楽のよさや美しさを根拠にして、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせることをねらいとした。そのために、生徒の音遊びを教師が楽譜に可視化(資料５)して、音遊びを聴き合う活動と、「あなたが交響曲第５番ハ短調を(BGM として)流すならどんな場面や状況だろう。」という発問に対する考えを伝え合う活動(批評する活動)を設定した。音遊びを聴き合う活動では、資料６のように楽譜上でどの部分が面白いのかなど説明する姿が見られた。これは、可視化した楽譜から、動機の反復の仕方や変化を根拠にして音遊びで遊んだことのよさや美しさを見いだすことができたと言える。また、音遊びを聴き合う活動後に、鑑賞曲を再度聴くと、「動機などで迫力のある音色になったと思ったらいきなり音色が柔らかくなったり迫力がでてきたりと聴いている人がとても楽しめる良さがあると思った。」「動機が何回も繰り返されるところが面白い。動機の音程や速度が変わったり、動機が重なったりして雰囲気が変わっていくから飽きない。」といった記述が見られた。これは、鑑賞曲のよさや美しさを自己のイメージや感情と関わらせて明確にもつことができていると言える。さらに、「あなたが交響曲第５番ハ短調を(BGM として)流すならどんな場面や状況だろう。」という発問に対する考えを伝え合う活動(批評する活動)では、「はじめの動機は、起きたら集合時間が過ぎていた時のショックな感じで、そのあと動機が休みなく繰り返す部分は焦っている感じがした。」「ゲームに例えると、１位になれると思ったところで敵にやられ、最下位になった時。」という発言があった。これは、自分の経験上の感情と音楽を聴いた時の感情とをさらに、重ねて考えることができたと言える。つまり、音楽と自分とを関わらせることができたと言える。これらのことから、音遊びを聴き合う活動や、発問に対する考えを伝え合う活動の設定は、音楽のよさや美しさを根拠にして、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせるために有効だったと言える。



資料５　生徒の音遊びを可視化した楽譜



資料６　楽譜上で説明する姿

(4) 全体考察

資料７は、第１時で「交響曲第５番ハ短調」を聴いた時の生徒Ａの記述である。第１時では、動機の反復や音高、速さ、音色の変化について気付くことができている。資料８は第２時の創作タイムを経て第３時で再度聴いた時の生徒Ａの記述である。「動機が低い音から高い音まで重なると重厚感が増す。」「節目でも動機を活用してくるところが音楽の良さだなと感じた。」といった曲想と音楽の構造との関わりを理解し、よさや美しさを根拠に音楽と自己のイメージや感情とを関わらせることができている記述がみられた。これは、音遊び(創作タイム)を題材構成に位置付けたことで、曲想と音楽の構造とを関係的に捉え、音楽のよさや美しさを見いだすことができたと言える。また、生徒Ａは、終末段階の「あなたが交響曲第５番ハ短調を(BGM として)流すならどんな場面や状況だろう」と考えた時に、資料９のように「動機が反復して重なっていくところが(自分自身が)ドキドキする」といった感情を自覚することができている。このことから、音楽のよさや美しさを根拠にして、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせ、自分にとっての価値を考えながら音楽を聴くことができたと言える。学級全体を見ると、実証授業前は音楽と自己のイメージや感情とを関わらせて、自分にとっての価値を考えながら音や音楽と向き合うことができた生徒は、12.9%であった。実証授業後は、生徒Ａと同様に、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせて、自分にとっての価値を考えながら音や音楽を聴くことができた生徒は74.2%であった(資料10)。このように、動機を使った音遊び(創作タイム)を設定したり、教師の発問に対する考えを伝え合う活動(批評する活動)を設定したりすることによって、曲想や音楽の構造を表層的に捉えたり関係的に捉えたりして、見いだした音楽のよさや美しさを根拠に、音楽と自己のイメージや感情とを関わらせ、自分にとっての価値を考えながら聴くことができたと言える。つまり、音楽を深く味わうことができたと言える。以上のことから、中学校鑑賞領域の学習において、創作タイムと批評を関連させた題材構成は、音楽を深く味わう上で有効であったと考える。

最初の動機がどんどん変化していって、高さ、速さ、テンポが変化した音が重なって聞こえた。←弾いている楽器も異なっていたので、音色も違った。最初の動機と二番目の動機は同じだったが、次からは音階が違った動機になっていった。

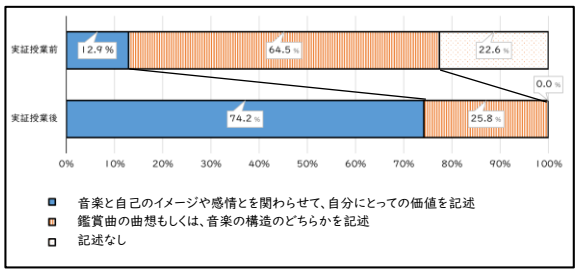
資料７　第１時の生徒Ａの記述

私が思う「交響曲第5番ハ短調」の良さは、動機の重なり方や音色を生かして音楽を成り立たせているところだと思う。最初の重なる方は一つの楽器だけで重なっているけれど、最後の重なるところは、低い音から高い音まで重なって重厚感が増すところが美しいと感じた。また、強弱が激しいところから緩やかなところに移り変わるとき、明るくて軽い音色がなり、節目のところでも動機を活用してくるところもこの音楽の良さだなと感じた。

資料８　第３時の生徒Ａの記述

発表するとき、友達を怒らせたとき	気持ちがドキドキしているときや、ズーンとしたときに、響きそうな音楽だったから。特に、動機が次々と重なっていくところがドキドキするように聞こえました。

資料９　生徒Ａの場面や状況を考えた記述



資料 10　自分にとっての価値を考えながら音楽

(5) 研究の成果と今後の課題

ア　研究の成果

○　創作タイムを位置付けた題材構成は、体験的に知覚・感受したことを根拠にして、曲想と音楽の構造との関わりを理解する上で有効であった。

○　聴く、創作する、批評する活動における支援の工夫による教師の価値付けや発問は、音楽を深く味わうという目的を持続させながら創作タイムや批評する活動を行う上で有効であった。

イ　今後の課題

○　音楽をより深く味わうために、他者と考えを共有したり共感したりして、自己のイメージや感情を豊かにすることができるように、批評する活動における手立ての工夫が必要だと考える。

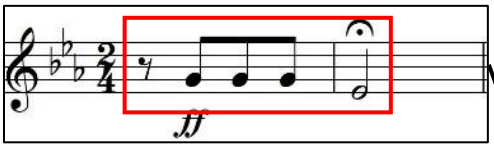
＜参考文献＞

・ 福岡県教育センター（平 23）「我が国の伝統音楽のよさや美しさを味わうことができる生徒を育てる音楽科学習指導－創作リレーを位置付けた鑑賞活動を通して－」

【添付資料】

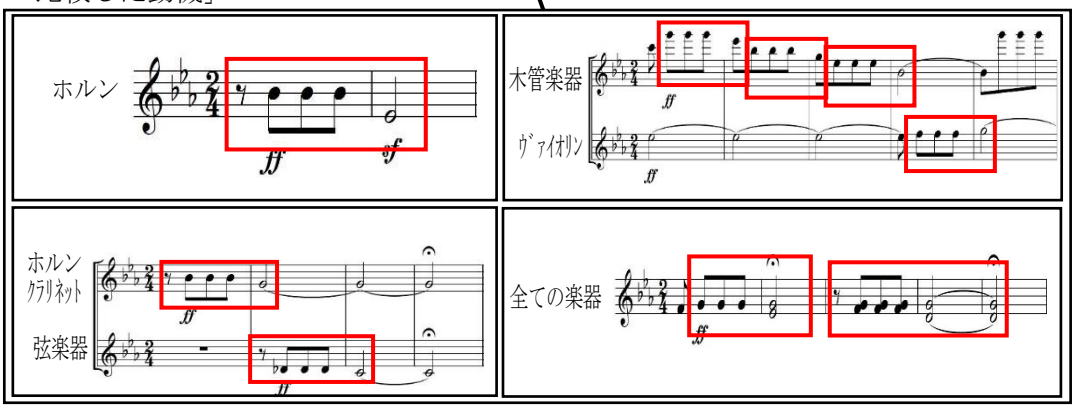
○　第１時で聴き比べた動機の楽譜と生徒の姿や板書

「冒頭の動機」



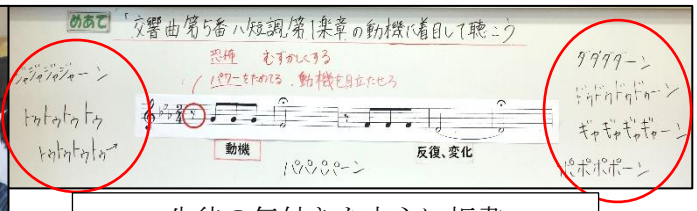
共通点：リズム
相違点：構成（反復、変化）

「比較した動機」



「生徒の様子（リズム演奏、指揮）」

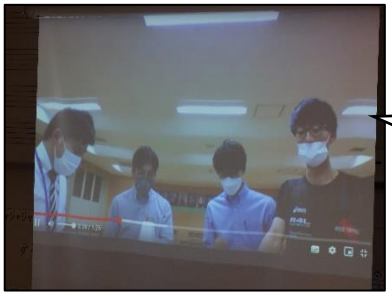
「板書」



生徒の気付きを中心に板書

○　第２時の創作タイムのモデル演奏、生徒の様子

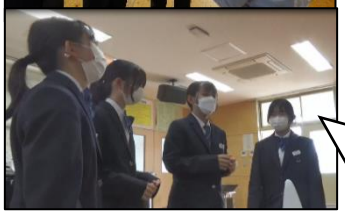
「教師によるモデル演奏の提示」



創作タイムの音遊びを実演した教師によるモデル演奏

「生徒の様子（創作する活動）」

動機を使って、反復や変化を試している様子



反復や変化を試したことを、全体で交流している様子

「生徒の様子（聴く活動）」

交響曲第５番ハ短調の動機のリズムを確認しながら聴き返している様子

交響曲第５番ハ短調の楽譜を見て、動機の反復や変化を確認しながら聴き返している様子

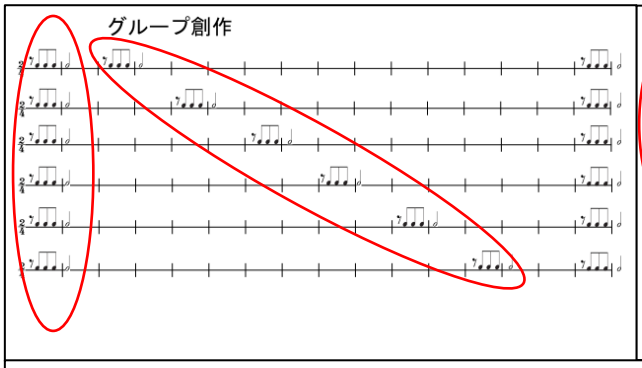
○　第３時の可視化した楽譜

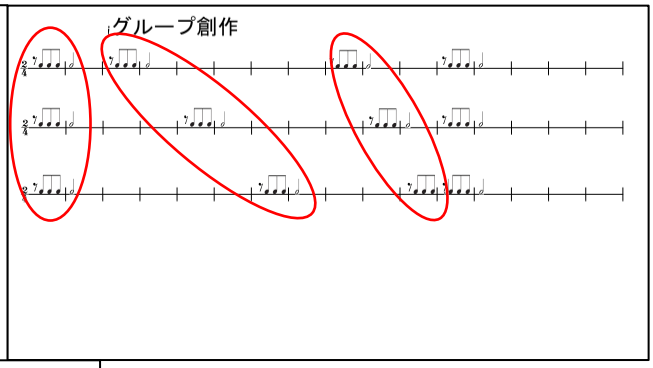
「生徒の創作タイムでの作品を可視化したもの」

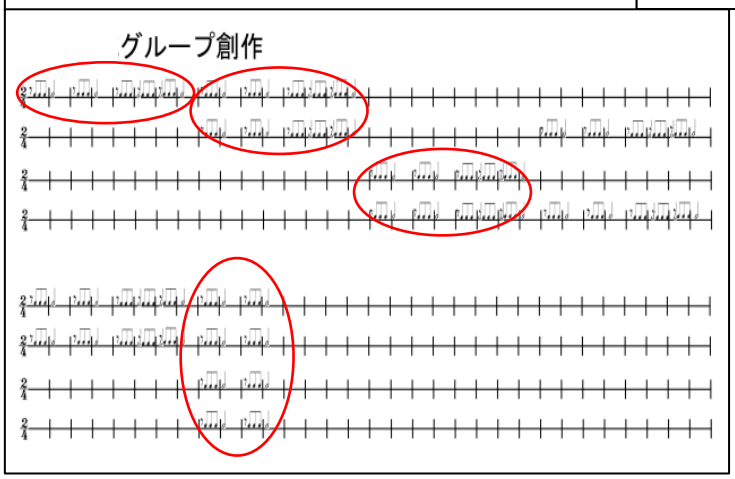
グループごとの音遊びを録音して、協働学習支援ツールに提出

可視化

様々なパターンの繰り返し方と、演奏するパートや重なりの変化、最後は全員で動機を繰り返すといった反復や変化を楽譜から捉えることができる。







第３時の批評する活動の様子

○　第１時と第３時の生徒の変容

動機の部分の音が上がったり下ったりした。使っている（動機の部分を演奏する）楽器が変わった。←ジャジャジャジャーンの曲想（イメージ）が変わって、ジャジャジャジャーンからダダダダーになった。
ジャジャジャジャーンからジャジャジャジャに変化しているところがあった（最後が伸びている→伸ばさず切るへ変化）。

全く同じ動機を繰り返しても途中で飽きてしまうので、テンポ・音階・演奏する楽器を変化させることで、何回動機の繰り返しがきても聴いている側が飽きず変化を楽しみながら聴くことができるところがよさ。楽器によって動機を演奏したり他のリズムを演奏したりと、異なる音を弾いていても、音が混ざらず、綺麗に重なっているところが美しいところ。

第１時で気付いた音楽の構造を、創作タイムを経て、体験的に理解した曲想と音楽の構造との関わりを根拠にして、自分のイメージや感情を説明することができている記述。

○　実証授業前後の生徒の変容

「フーガ　ト短調」は、パイプオルガンの音が変わると明るさは変わるが、不気味さは変わらない曲。

実証前「フーガ　ト短調」を鑑賞

演奏している全員が休憩することが少なく音のつながりがあって飽きることがない曲。運命という曲を聞いていると、その時代背景が浮かんでくるような感じがした。
いろんな楽器を使った演奏で動機があるので聞いてて違う曲と思うような楽してる曲。

実証「交響曲第５番　ハ短調」を鑑賞

実証前は、楽曲の事実のみを記述していたが、実証では音楽と自己のイメージや感情とを関わらせて、自分にとっての価値を考えることができている記述。